

魏志倭人伝の葬送記事にみる棺槨の意味

門 田 誠 一

序

魏志倭人伝の葬礼に関しては卑弥呼の死に際する記事と倭人一般の習俗の描写とがあり、後者は「其死有棺無槨、封土作家。始死停喪十日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒。已舉擧家詣水中澡浴、以如練沐」と記されている。この部分は「その死には棺有るも槨無く、土を封じて冢を作る。始め死するや、停喪すること十余日、時に当たりて肉を食わず。喪主哭泣し、他人就いて歌舞し飲酒す。已に葬れば、家をあげて水中にいたりて澡浴し、以て練沐の如くす」と読み下されることが一般的である。とくに「其死有棺無槨封土作家」の部分は、倭人の葬送習俗を示すものとして注目され、とくに棺槨（コウカク）に関する記述である「棺有るも槨なし」の箇所は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての実際の遺構としての木棺や木槨と対照して検討されるにいたっている。

本論では魏志倭人伝にみえる棺槨が経書などの中国古典にみえる語であることから、出典・典拠による語義の検討を行い、『三国志』の編纂時点での同時代的な認識をもとめる。あわせて『三国志』編纂と同時代を中心とした中国・日本の木棺と木槨について現状での考古学的知見を示し、実態と魏志倭人伝とを比較したうえで『三国志』にみる棺槨を通した倭人に関する認識に接近することを目的とする。

一 棺槨の語に関するこれまでの研究

魏志倭人伝の膨大な研究史のなかでも、棺槨の語に関する言及は少ない。その中で学史を整理し、評価を行った論著として著名な三品彰英氏の『邪馬台国研究総覧』では棺槨について『説文』を引いて、棺を「うちかん」であるとし、槨は棺をめぐらす「そとひつぎ」であるとし、『三国志』東夷伝韓伝にも「有棺無槨」としていることから、倭韓共通の墓制があったとし、弥生時代から古墳時代にかけて行われ、朝鮮半島にもみられる箱式石棺をこの語の示す墓制とし、また弥生時代後期の木棺墓も該当するとした。²⁾

佐伯有清氏は棺が死体をじかに収納する箱で内棺であるとし、槨は椁とも書き、死体を納めた棺をめぐらす外箱であり、外棺ともいうと定義した後、『孝経』喪親章にみえる「棺槨」について、「尸を周（めぐ）らすを棺と為し、棺を周らすを槨となす」という後漢の鄭玄の注を引いて説明する。魏志倭人伝の「其死有棺無槨」という記述については『論語』先進篇に孔子が顔回（顔淵）の死に際して言ったとされる「棺有りて槨無し」という語に通じるとする。また、同じく『三国志』魏書東夷伝の夫余条に「厚葬にして、槨有れども棺無し」とあり、あるいは韓条に「その葬は槨有れども棺無し」とあるのを引き、倭人とはまったく逆であることとし、さらに棺はあるが槨はないという倭人の葬送習俗は考古学的にも裏づけられているとする。³⁾ 魏志倭人伝の棺槨についての佐伯氏の指摘のなかで重要なのは『孝経』『論語』などの経書にみえる棺槨の語や『三国志』東夷伝の夫余や韓などの類似の内容との比較と考古学的知見との対照である。佐伯氏の論著は一般向けの解説書として性格から、これらはいずれも指摘にとどまっているが、本論における検討の先蹤として導かれたところが多い。

魏志倭人伝の記述に限るのではなく、中国古代における棺槨そのものについては、栗原圭介氏による詳細な論考がある。この研究では棺槨の起源について経書などの記述と中国における考古学的見解から考定した後、棺槨の用

材、身分による棺槨の階層制および用材のなかでの梓・松・柏の崇拜などについて古典や経書の記述を引いて精緻な考証を行った。^④このような観点に関して、本論で参照するところは多い。

以上の研究にみられるように本論は魏志倭人伝の葬送に関する記述のなかでも棺槨と葬送の厚薄の観点から、漢魏晋代の考古資料と文献記載を検証することによって、卑弥呼の墓と葬送に対する『三国志』編纂時点における同時代的な価値観と認識の復原を目的とする。

二 中国史料・文献にみえる棺槨

棺あるも槨なしとする魏志倭人伝の記述と関連する内容が経書や史料に散見する。そのなかで倭の葬礼記事を経書や史書との対比で位置づけるために参照される記述について以下に検討していきたい。

まず、棺槨の語そのもの説明としては、『礼記』壇弓上に斉の国子高の言として、葬とは蔵であり、蔵とはものをしまつて見えないようにすることであり、衣服が死者を包み、棺が衣服を収め、槨が棺を収め、墓土が槨を収める、かえつてこれに壤樹（樹を植えた標識）するとは、と述べられ、棺と槨の機能にふれている。^⑤

いっぽう、魏志倭人伝の倭と同じく棺のみを用いることに関しては、『論語』先進篇には次のような記述がある。亡くなった子のために顔淵の父である顔路は、孔子の車を用いて槨を作ることを請願した。孔子は自らの子である孔鯉が死んだ時にも「棺」だけで「槨」を作らなかつたことを述べて、これを断つた、という。^⑥

葬送に際する棺と槨の使用に関連して、棺については『荀子』正論に世俗の説をなす者の意見として、「太古は薄葬にして、棺の厚さ三寸、衣衾三領、葬るに田を妨げず、故に掘らざるなり」とあり、ここでは槨を用いず、三寸（現在の七センチメートル弱）の棺のみを用い、農耕の妨げにならないところに埋葬したために、掘り返されることがない、とあり棺と死者の衣によって薄葬のあり方が説かれている。^⑦ただし、この三寸とは実際の寸法という

よりは、薄さを強調した比喩として用いられているとみたほうがよい。

ここでいう世俗の説をなす者の意見とは『墨子』の説を指し、その節用中には「古は聖王制して節葬の法をなす。いわく、衣は三領、以て肉を朽ちしむるに足り、棺は三寸、以て骸（むくろ）を朽ちしむるに足る」とある。^⑧また、節用下には「棺三寸、もつて体を朽ちしむるに足り、衣衾三領、以て悪を覆うに足る」とあり、^⑨三重の衣で死者の肉体を朽ちさせ、三寸の棺でその骨を朽ちさせるに十分であると述べている。これらを総じて解釈するならば、死者の肉体や骸骨は本来、朽ち果ててしまうものであり、それまでの間に覆うものとして、棺や衣があるということになる。すなわち、棺は衣と同じ程度に遺骸を覆うものであって、これを根柢として『荀子』正論では棺のみを用いるのを薄葬としていることがわかる。『論語』にみえるように「槨」を用いない埋葬が端的な薄葬であるとすれば、『荀子』に三寸の棺として象徴的に述べられた簡素な棺も薄葬の物質的な顕現であるという脈絡で理解されよう。

このことは『礼記』壇弓上にみえる棺槨に対する記述からも裏付けられる。すなわち、桓司馬は自分の石槨を作ろうとして、三年かかっても完成しないのを見た孔子が、それを贅沢であり、死ねば遺骸は速やかに朽ち果てる方がよい、と述べたと記される。^⑩ここでは死後すみやかに朽ち果てることを象徴的に述べ、石槨にことよせた桓司馬の贅沢を批判するための言説としてみえている。また、その後段には有子が伝えた孔子の言として、かつて孔子が魯の中都の諸制度を定めた時、棺は四寸、槨は五寸と決めたため、これにより孔子は速やかに遺骸が朽ち果てることを望まないことを知った、と記されている。^⑪ここでは『墨子』にみえる簡素な三寸の棺が遺骸を朽ちさせるとしていたのとは異なり、孔子は遺骸が腐朽しないように手厚く葬る考えがあったことを特記するために四寸の棺と五寸の槨とによって、ことさらに強調するものとしてとりあげられている。この内容は実際には孔子の言とは考えにくいとされているが、儒教的葬礼における棺槨の規範について明確に述べている。すなわち礼にかなう葬送は四寸

の棺と五寸の槨を基本として、それ以上でなければならぬのであって、さらにこれを満たすことによって死者の肉体が朽ちにくくなるとしている。つまるところ棺と槨についての重要な言及であり、このような棺槨に納めることにより、遺骸の保全を図り、それが葬礼の本来のありかたとされていたことがわかる。

さらには四寸の棺、五寸の槨を基準として、それに及ばない棺の厚さ及び槨を用いないという点から、さきにふれた三寸の棺が薄葬とされたのであって、葬礼の規範として認識されていたことが知られる。ただ、ここでもやはり四寸、五寸は三寸より厚いという比喩あるいは認識を含む語としてみたほうがよい。

このような棺の簡素さによる薄葬に対する思惟のいきつくところは棺を用いない埋葬である。この考えは前漢の武帝期の人である楊王孫が自らの葬送に際して主張した「羸葬」として発露する。楊王孫の事績は『漢書』楊王孫伝に詳しいが、それによると彼は黄老の術を学び、家は千金を生む仕事を行っていた。病気になって死が近づくと、子供に対し、自分が死んだら死体を袋に詰めて穴に入れ、穴の中で袋から出して死体を土に還すように厳命した。

子はそれに従いたくなかったが、父の命令に背くこともできず、楊王孫の友人である祁侯に相談したところ、祁侯は楊王孫に手紙を送り、もし死者にも知覚があるとしたら、裸で先祖に会うことになるとして、羸葬を引きとめるべく説得したが、楊王孫は、現今は礼の制度を超えて厚葬に過ぎるから、自分を羸葬にすることでそのような世を矯正したのであり、厚葬しても財貨を地下で腐らせるだけで、盗掘されればどのみち死体を野ざらしにするのと変わらない、と返答し、説得に応じず、ついに羸葬にされた、という¹²⁾。ここで楊王孫が説く「羸葬」とは、「死せばすなわち布囊もて尸を盛るをなし、地に入ること七尺、すでに下らば足従(よ)り引きてその囊を脱し、身を以て土に親しませよ¹³⁾」とあるように、自らの遺骸を袋に入れて墓壙に下した後に、袋をはずして、遺骸が直接に土と接するようにするというものであり、棺やそれを覆う槨の使用とは無縁の葬法である。このような手順による「羸葬」の「羸」は「袒」すなわち「はだぬぎ」のことであり、これは「裸」または「裸」に通じ、すなわち裸体

のまま埋葬することを意味するとされる。¹⁴

これらの記述からは棺が死者の肉体を土と隔てるものであり、葬礼にとって不可欠なものであることがわかり、これはさきにふれたような四寸を棺と五寸の槨を用いれば遺骸が朽ちにくいという内容と同じ脈絡にある。すなわち、葬礼の規範にかなう棺槨を用いれば、死者の肉体の腐朽が妨げられるのであり、これを用いずに土との直接の接触によって腐朽を期するのが楊王孫の説く「羸葬」となるのである。

ここまでみてきたように棺槨の使用は肉体の腐朽と関連することがわかるが、その創始については、『礼記』檀弓上には有虞氏が瓦棺、夏后氏は塋周すなわち焼き物の二重の棺、殷人は棺槨、周の人々は牆（棺を蓋う衣類）や蓆（棺の飾り）によって埋葬するようになった、とある。¹⁵ここでは棺と槨とによって埋葬するという葬礼は殷から始まったとされ、当初は一重の瓦棺であり、それが二重の焼き物の棺へと変わった後に棺槨の制が始まることになっており、そのことがすなわち史上における葬礼の創始を説明していると解されよう。

このように遺骸の腐朽を防ぐ一定基準の棺や槨の使用は、当然ながら中国古代における死生観や他界観の変容と密接に結びついている。中国で棺と槨の使用されたのは西周代からとみられており、その後、変化を遂げながらも漢代にいたるまで用いられた。¹⁶このように長きにわたる棺槨の使用に伴う死生観や他界観としては魂魄の觀念がある。

魂魄とは魂と魄の二つの気が存在し、人が死ぬと魂魄は分離して魂は天に昇り、魄は地にとどまると説明される。¹⁷また、戦士の荒ぶる魂を慰撫する『楚辞』国殇の「魂魄毅兮爲鬼雄」すなわち「魂魄毅（たけ）くして、鬼雄と為らん」という文言に抽象化されるように、祭祀する者のいない魂魄は永久に飢えてこの世をさまよい、種々の災害を人間にもたらす。死者は最も身近な者に崇りをなすのを中国古代以来の祖霊觀念とされる。¹⁸

このような魂魄に関する記述は中国思想史の重要な課題であり、これを要することは紙幅も筆者の力量も超える

ことになるが、考古資料の検討としての本論に資する部分に局限しても、たとえば『莊子』外篇知北遊篇によると「魂魄まさらに行かんとし、すなわち身これに従う。すなわち大帰せんか」とあり、また、『韓非子』解老篇には「凡そ謂わゆる崇りとは、魂魄去つて精神乱るるなり。精神乱れば則ち徳無し。鬼、人に崇らざれば、則ち魂魄去らず。魂魄去らざれば而ち精神乱れず。精神乱れざるをこれ徳有り」とする。⁽²⁰⁾『楚辭』国殤には「身既に死するも神は以て霊なり、子の魂魄は鬼雄と為らん」とあり、「身」は死ぬもの、「神」は「霊」なるものとされており、さらに「魂魄」は人が死んだ後に「鬼雄」すなわち鬼となることを述べている。これらに典型化される魂魄の魂は精神、魄は肉体をつかさどる神霊であり、それらが合一すれば死者が蘇生するという考えから、中国古代には天に向かい、あるいは屋根に登り空に向かって呼び、死者を蘇生させようとする招魂儀礼が存在した。⁽²²⁾このような死生観および他界観にもとづくならば、遺骸の保全是蘇生につながる重要な要素であり、それはすなわち遺骸を守る棺槨の厚薄が葬礼や埋葬に対する根柢となっていたと考えられる。⁽²³⁾

このような観念から発して、棺槨の厚さは社会的階層の上下を示す可視的な表徴となる。すなわち、棺槨の厚さの意味するところについては『墨子』七患に財貨を浪費する象徴として、最上の褒賞を功なき者に与え、府庫を空にして車馬や衣服・珍器をそなえ、労働に従う人を苦しめて宮殿の歡樂をなし、死ねば棺槨を厚くし、死者の衣服を多く作り、生きては高樓を造り、死ねば墓を立派にすることをあげ、それゆえに民は苦しむと説いている。⁽²⁴⁾

また、『礼記』月礼には孟冬の月すなわち十月に百官に命じた内容として、棺槨の厚薄・墳丘の大小高低によって葬礼の厚薄の程度や貴賤の等級を審らかにするとあり、棺槨の厚さが厚葬や薄葬の程度や貴賤の弁別を示すことを端的に記している。⁽²⁵⁾

加えて、『礼記』礼器には、大なるをもつて貴尊とするものがあり、それは宮室の広さ、器皿の大きさ、棺槨の厚さ、墳墓の高さであり、これらは大きいことを貴尊とする、と記されている。⁽²⁶⁾『墨子』節葬下には批判の対象と

しての厚葬として、王公大人の喪にあたっては、棺槨は必ず重ね、埋葬は必ず深く、死者の衣類は必ず多く、棺の飾りは必ず細密に、墳丘は必ず大きくせよとある。²⁷⁾これらの記述では棺槨が埋葬施設の広さや副葬器物の数量そして墳丘の高低などともに棺槨の厚さが厚葬の基準の一つとなっていることがわかる。

また、棺槨の厚さのみならず、それらを重ねることが社会的身分の表徴となり、それを顕現したものととして、しばしば引かれるのが『礼記』壇弓上の記述であり、天子の棺は四重とし、牛に似た水棲動物の皮を張り合わせ、その厚さは三寸。その外側の棺は柂、さらにその外側は梓の棺であるとし、天子の用いる棺の構造や棺材についてふれている。²⁸⁾棺の多重性と身分階層の関係については、この他にも『荀子』礼論篇に、ゆえに天子の棺槨は七重、諸侯は五重、大夫は三重、士は再重、とあり、同様の記述は『莊子』雜篇にもみられる。³⁰⁾

このような棺槨の重層の程度や大きさを基準としたと身分階層については『礼記』喪大記、壇弓上の文章と注などから、天子・君（諸侯）・上大夫・下大夫・士・庶人の別が考定されている。論旨とははずれるため、詳細は省略するが、棺材の厚みに限っても、天子や諸侯・上大夫が八寸であるのに対し、下大夫・士が六寸、庶人は四寸という階層による等級が示されていることが知られる。³¹⁾これらの記述からは棺槨の厚さや多重性、そして木材の種類は身分制と直結し、これらの要件を充足する程度が遺骸の保全することにつながることから、厚葬であることの基準となった。

もちろん厚葬の基準は棺槨に限らず、すでにふれた『礼記』月礼や礼器に記されているように、棺槨の厚さのみならず墳丘の規模、墓室の広さや副葬品の多寡など多岐にわたるが、そのなかでも棺槨の厚薄や多重性は重要な要件の一つであった。

厚葬や薄葬と関連する棺や槨の語の用法が知られる記述としては、『後漢書』樊宏伝に樊宏が建武二七年（五一）に卒するに際し、薄葬して、副葬品を無くしたとあり、また、樊宏は死体が腐敗したら、孝子たちが心をいた

めるとして、埋葬した後に棺柩をあげないことを命じた。³²⁾ここでは「棺槨」ではなく「棺柩」の語が用いられており、薄葬を反映した埋葬法であり、後段でふれるように槨を用いなくなった時期の埋葬の実態を示すものである。

このような棺や槨の簡素さが薄葬を具現化することは、魏志倭人伝と同時代の魏晋代の史書・文献にも現れる。魏晋代には貴紳の間で薄葬が流行したが、これを象徴的に示すものとして「素棺」の語がしばしば用いられる。たとえば呉の重臣であった張昭は年八十一で嘉禾五年（二三六）に死んだが、遺言で幅巾（髪を包む質素な頭巾）をかぶり、素棺を用い、時服をもって葬るように命じた。³³⁾また、赤烏四年（二四一）に死んだ呉の諸葛瑾は素棺、時服で葬ることを遺命し、葬礼は簡略にするようにと命じたとある。³⁴⁾

このような素棺・時服は埋葬の簡略さを示しており、薄葬を象徴する定型句的に用いられる。素棺とは飾りのない白木の棺であり、時服とは四季の時候に合わせて着る衣服と解される。素棺・時服とはすなわち遺骸に葬送用ではない生時のままの衣服を着せたまま質素な棺に納めることを指している。素棺の対照である厚葬に用いる棺としては諸侯王・公主・貴人はみな樟棺で、洞朱・雲気画を施し、公は特に樟棺に黒漆を施すという『後漢書』礼儀志の記述が参考となる。³⁵⁾王侯の用いるものではあるにしろ、樟材によって作られ、漆で雲気などの文様が施された棺は厚葬の要件であって、この種の棺に對置するものとして素棺は薄葬の要素として意識されていた。³⁶⁾これらの記述によるならば中国古代の葬礼において、棺槨は数および重ね方とその厚さが厚葬と薄葬をわける基準の一つであった。

三 中国・朝鮮半島・日本の棺槨の実態

ここまで中国史書・文献・経書などにみえる埋葬に関わる理念としての木槨について論じてきたが、以降の論旨に関わる範囲において、魏志倭人伝の内容や編纂と時期的に近い中国・朝鮮半島および弥生時代の棺槨について、

近年の研究を摘要することによって、各地の研究を比較、参照し、魏志倭人伝と同時代の東アジアにおける棺槨の実態を概観し、ここまでの知見と対照検討を行う前提としたい。

(一) 中国の棺槨研究

中国古代の棺槨の研究のなかでも、本論の目的にとって重要となるのは棺槨の変化と時期ごとの階層性さらには『三国志』と同時代の棺槨の実態である。ここでは論旨に関連する範囲で墓制総体の構成として取り上げるのではなく、とくに棺槨の専論を主体に整理しておきたい。

その前提として中国古代における棺槨の初現について必要な限りでふれておくと、考古資料から論じた早い時点での研究としては郭宝鈞氏や劉仕驥氏の論考がある。郭宝鈞氏は中国の古代を青銅器時代とし、五期に時期区分し、そのうち二期とした殷代後期と三期とした西周代を棺槨の盛行した時期とする。劉仕驥氏は一九五〇年代前半までの殷代の墓制を検討し、木材を用いた棺槨の制が殷代に入ってから行われたことを明らかにした。³⁸⁾

李玉浩氏は周代の棺槨制度は『礼記』などの経書・礼書の記述とは差異があるとし、文献内容と符合する棺槨の制度は西周代の初め頃には未だみられず、戦国時代末に出現し、前漢代に形成されたとする。³⁹⁾

その後の考古学資料の増加によって、墓制としての棺槨の出現は新石器時代にまでさかのぼることがわかっていく。新石器時代の棺槨は相当の例があり、そのなかでも遺構としての残存状態が良好なものとしては、崧沢文化に属する浙江嘉興・南河浜遺跡（一四号墓など）、⁴⁰⁾良渚文化の普安橋遺跡（一九号墓など・図1-1）、⁴¹⁾大汶口文化の標識遺跡である山東泰安・大汶口遺跡（二一〇〇六号墓）、および山東龍山文化の山東鄒県・野店遺跡（五一墓など）⁴³⁾があげられ、いずれも一基の木槨のなかに一基の木棺が納められていた。同じく山東龍山文化期の山東臨朐・西朱封遺跡では木槨が内外の二重になっており、内側の木槨のなかに木棺と副葬品を納めた墓（1号墓）が検出されている。⁴⁴⁾このような先秦時代の棺槨については、①棺槨の萌芽期―新石器時代中頃から後半②棺槨の勃興時期―

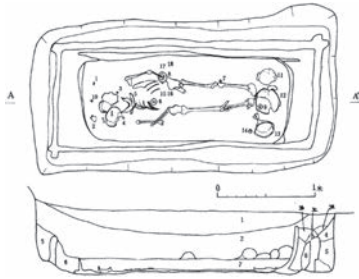
商代③棺槨の盛行期―西周から春秋時代④棺槨の衰退期―戦国時代以降という段階的な変容が考えられている⁽⁴⁵⁾。

先秦時代から漢代にいたる墳墓における槨墓から室墓の変容を論じた黄暁芬氏は槨の出現は新石器時代とし、商代になると王墓の槨が大型化するとともに中小型墓でも槨が普及し、西周代には槨の展開と普及がみられ、続く春秋戦国時代には版築墳丘や墓上建築が取り入れられるとともに、墓制の地域色が明確になるとする。漢代に入ると槨は衰退し、戦国期には存在しなかった室墓が出現するとみる。室墓とは羨道・玄門などによって外界に開通し、これにともなうて祭祀空間や複雑な構造の天井部が発達し、槨墓から室墓へと変遷し、これは宗廟祭祀から墳墓祭祀への変容と関係するとみる⁽⁴⁶⁾。

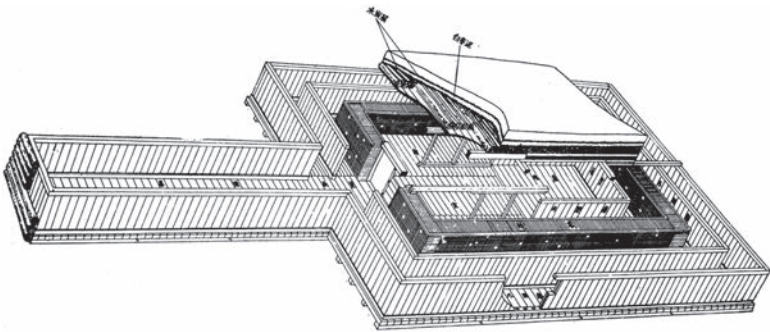
近年では新石器時代から南北朝までの棺槨の変遷と消長を整理した袁勝文氏の研究があり、以下に摘要する⁽⁴⁷⁾。新石器時代中期後半頃には棺槨が出現するとされ、新石器時代の後半には、龍山文化期の墓地遺跡である山東・泗水尹家城遺跡⁽⁴⁸⁾などを典型として、棺槨の数による階層性がみられるようになるとし、これをもって棺槨の制度的形成とする⁽⁴⁹⁾。商から西周には棺槨の制度が発展し、春秋時代中頃から戦国時代の始めにかけて、多重棺槨の制度が完成し、本論でもふれた経書などの符号がみられるとする。これをもとに秦・前漢代の棺槨は展開を遂げ、黄腸題湊墓(図1―2)にみられるような変容も認められる。前漢末頃から棺槨は衰退がみられ、後漢代には磚(塼)室墓・崖洞墓(洞室墓・崖墓)の展開によって棺槨は消滅するとされる。

漢代の埋葬遺構の研究から、設置空間としての槨は後漢代初めまでであり、その後は、構築材として磚を用いた室や土中を掘削した洞室墓が盛行し、端的に言えば槨から室へと墓室すなわち棺を納める空間が変容していくことが論じられている⁽⁵⁰⁾。

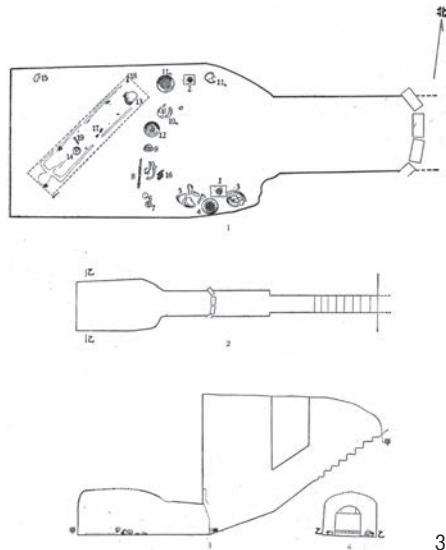
前項でふれた史書・文献に現れる多重の棺槨に関連して、前漢代を中心として多数の多重の棺槨を備えた墓があり、その主な例を類型化する試みもなされている⁽⁵¹⁾。多重の場合は棺と槨の認識が難しい場合もあるが、直接に遺骸



1 普安橋遺跡19号墓



2 北京・大葆台漢墓（黃腸題湊墓）



3 洛陽・燒溝一四七号墓

図1 中国の棺槨とその他の墓制の例
(2、3は縮尺不同)

を納めた棺を覆う装具を基準としてみると、二重（安徽双墩M1重槨重棺、河北石家庄小沿村漢墓一槨二棺⁵³、湖南長沙望城坡漁陽墓二槨二重棺⁵⁴、湖南風篷嶺M1二重漆繪棺⁵⁵など）、三重（河北獻県M36三重棺⁵⁶、湖南長沙象鼻嘴M1三重棺⁵⁷、山東双乳山M1二槨三重棺⁵⁸、北京大葆台漢墓（図1-2）二槨三重棺⁵⁹、北京老山漢墓二槨三重棺⁶⁰、五重（河北定県四〇号墓五重漆棺など）の類型に整理されており、このような検討が可能なほど前漢代には多重の棺槨が重視されていたことを示している。

いっぽう、洞室墓は土洞墓とも称され、近年の後漢末から三国時代の墓の要説のなかで、たとえば後漢代末の紀年銘遺物を伴う墓では「初平元年」（一九〇）を含む文章が朱書された陶瓶が出土し、二基の木棺が残存していた洛陽・焼溝一四七号墓⁶²（図1-3）が典型例としてあげられる場合があるように、土を掘りぬいた墓室に木棺を安置する類型が知られる。ここまでみてきたように、棺槨の制度的完成の時期等には見解の相違もあるが、その盛行は前漢代までとみるのが一般的であることが知られた。

近年では三国時代の墳墓の発掘資料を整理した研究も示されている⁶⁴。それによると、魏代の墓は基本的に多室磚墓が主体であり、墓室が複数の双室墓や単独の単室墓も存在するが、基本的には磚室墓であり、木槨は用いず、墓室内に木棺等を設置する。呉・蜀の墓は調査事例が少ないが、磚室墓が基本であり、墓室の構成等も大きな違いはない。ただし、蜀の領域では崖墓がみられることが特色である。いずれにしろ、木棺を覆うための施設である木槨は三国時代にはみられなくなっていることを再確認しておきたい。これに関しては、近年、発見された曹操の墓とされる西高穴二号墓（河南省安陽市・図2-1）も、出入口をもつ磚室墓であったことも重要な証左となる⁶⁵。

すなわち、『三国志』編纂時期には、すでに墓制として槨は主流ではなく、原則的には存在しないことが明らかにされている。このような考古学的知見からも、棺槨の語が同時代的な実態を指し示すのではなく、葬礼における理念的な規範であることが知られる。そして、このような槨から室への墓制の変化は、死者との関係では、槨が地

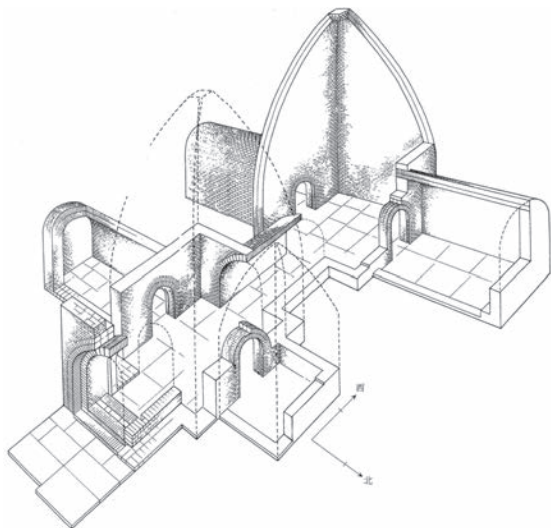
中深くに敷設され、その根底には死者と現実世界との隔絶を期する他界観によっているのに対し、室には通路が付設されていることから、墓室と現世および生者をつながる空間へと、その意味が変化したことになり、これによって死者に対する祭祀も変容したと考えられている。⁶⁶⁾

(二) 原三国時代の棺槨研究

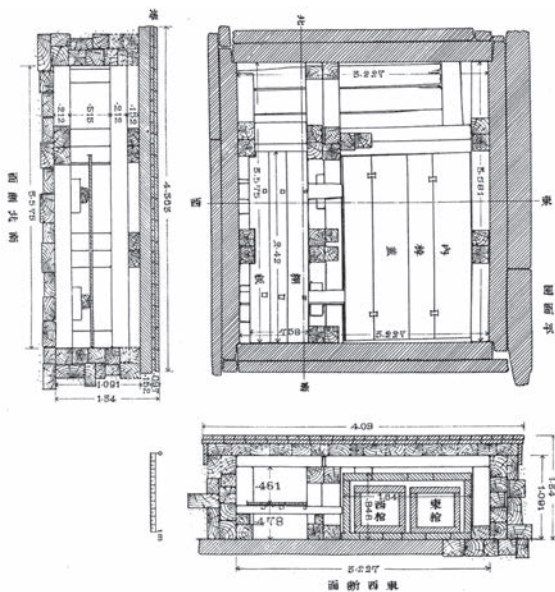
楽浪の木槨墓に関しては高久健二氏による一連の研究がある。そのうち本論に関係する点を摘要すると、楽浪木槨墓(図2-2)の始原は楽浪郡設置前後の紀元前二世紀後葉から紀元前一世紀前葉頃であり、初期の木槨の形態は長方形単室墓であり、その後、一世紀中葉以降には本格的な漢式木槨墓が造営されはじめ、副葬品も漢式遺物が増加するとした。木槨の変化から導き出された楽浪における葬法発現期とされる単葬木槨墓から、紀元前一世紀中葉頃には併穴合葬木槨墓となり、紀元前一世紀後葉になると同穴合葬木槨墓へと変遷するとした。また、楽浪郡の木槨が出現する契機に関しては楽浪郡設置をさかのぼる紀元前三世紀以前の衛滿朝鮮時代より、漢式木槨墓とは異なり、非漢式遺物が出土する長方形単葬木槨墓が造営されていたと推定する。そして、楽浪の木槨墓は衛滿朝鮮の在地的な非漢式木槨墓に漢式木槨の影響を受けて成立したと推定し、初現期には非漢式木槨墓の要素が濃厚に残存しており、紀元前一世紀中葉以降になって本格的な漢式木槨墓が造営されるとみる。また、楽浪木槨墓の終焉については、二世紀後半頃に磚(塼)室墓が出現し、その後、三世紀には墓制の主流は磚室墓へ移るが、その時点でも上位階層の墓は木槨墓やその系譜をひく木室墓を採用しており、このことから楽浪における高位階層の墓制が木槨墓であったと推定している。⁶⁷⁾

また、『三国志』東夷伝にみえる東夷諸族の墓制に対する全体的かつ包括的な研究が東潮氏によってなされており、三韓では木槨と木棺をあげ、これらを含む墓制と文献の対応が整理されている。⁶⁸⁾

楽浪の墓制との関連を踏まえて、韓国中・南部における木槨墓の出現と展開に関しては、それまでの木棺墓に加



1 河南・安陽西高穴二号墓



2 楽浪木槨墓・貞柏洞127号墓（王光墓）

図2 三国墓制と周辺の棺槨の例
(1はスケールアウト)

えて、二世紀前葉から中葉頃に小型木槨墓が出現し、三世紀代には木槨墓の大型化が進行するとし、楽浪・帶方郡との交渉を示す漢式鏡・銅鼎・環頭大刀などが出土することから、これらの地域の高位階層に属する人士が楽浪の高位階層の象徴たる木槨墓のような厚葬を志向していたとみる。その後、韓国中・南部の木槨墓は四世紀以降には副槨をもつ大型木槨墓として展開し、五世紀になると堅穴式石槨墓が首長墓の主流になるが、石槨内に木槨を構築する事例もあり、とくに韓国南部地域では六世紀代まで木槨墓が用いられるとし、三国時代においても木槨墓が首長墓を象徴する墓制と位置づけられている。⁽⁶⁹⁾

いっぽう、原三国時代の木槨墓については李柱憲氏の研究があり、青銅器時代の石槨墓と原三国時代の木槨墓の構造の類似を指摘し、金属製工具の伝来によって木材の加工が容易になったことにより、紀元前一世紀頃に石槨から木槨へと変化したとし、木槨の系譜に関しては出土遺物の観点から、青銅器時代の土着的文化要素に中国と楽浪の文化的要素が結合しているとみて、文献にみえる箕子朝鮮の滅亡とこれによる国際情勢の変化などとの関連性を示唆した。⁽⁷⁰⁾

原三国時代の木槨墓に関しては、墓の立地・遺物出土数量・青銅器などの威信財の質量によって等級化を行い、それによって階層社会の変化様相を検討した研究がある。青銅器使用から鉄器の用いられる時期にかけての木槨墓を等級的に整理し、最高等級の木槨墓の造営様相が単独墓から群集墓へと変化すると概観した結果、独自の政治勢力をもった首長ではなく、実際のな経済力をもった新たな勢力が社会の最高階層となつていったという社会構造の変化と関連すると結論した。⁽⁷¹⁾

木槨墓については韓国南部の事例を対象とした李在賢氏の研究があり、それによると三世紀末頃には慶州とその隣接地域を中心として同穴副槨をもった細長方形木槨墓が出現し、金海・釜山地域で異穴副槨が用いられ、時期が降るにつれて幅が広くなり、これは副葬空間の拡大および副槨の出現と関連するとし、とくに初期の木槨墓には槨

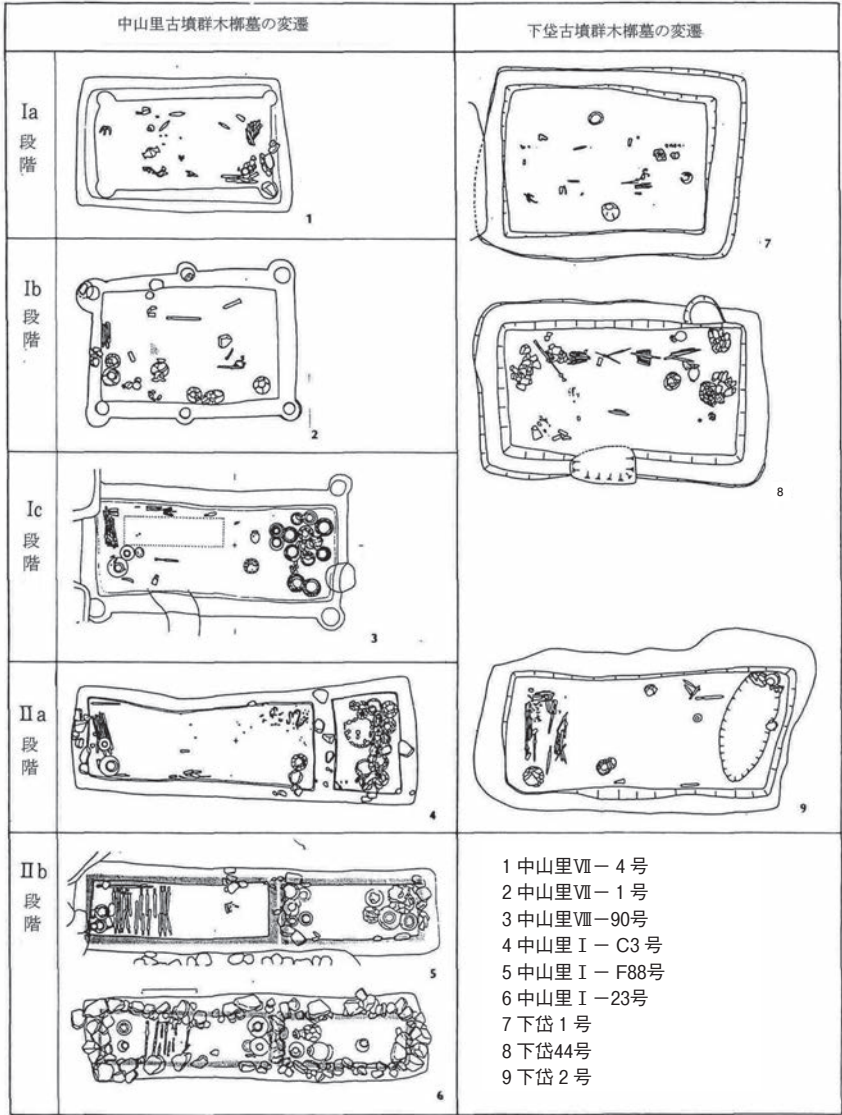
が用いられず、合葬も行われないことが特徴であるとし、四世紀代になると殉葬がみられるようになるとする⁽²⁾。

木槨墓の出現については蔚山・中山里遺跡と茶雲洞遺跡を対象とした李盛周氏の研究があり、原三国時代の木槨墓は基本的に楽浪地域木槨墓の影響であると、韓国中部地域における木槨墓は構造と木槨内の配置や副葬品の配置状態などの点から、楽浪の木槨墓の影響を受け、二世紀中葉頃にそれまでの木槨墓から木槨墓へと墓制が変容したとする(図3-1)。いつぼう李氏が弁辰韓地域とする韓国南部では、韓国中部よりやや遅れて二世紀後葉に楽浪地域の合葬木槨墓を模倣して受容したとし、木槨受容の地域性を論じている⁽³⁾。

木槨墓の地域の様相に関する研究をあげると、たとえば、権龍大氏は慶州地域では二世紀前半頃に木槨墓が出現し、その後、囲石木槨墓から積石木槨墓へと変化しつつ六世紀頃まで造営されるとみる。出現期の木槨墓はそれまでの木槨墓とは立地・平面形態・遺物構成などで明らかなる差異があり、とくに墓の形態としては墓壙と木槨の間空間があることが特色で、土器・鉄器・漆器などの多数の副葬品がみられ、被葬者の周囲には地位を象徴する青銅器・鉄器など、木槨上部には馬具類が配置されるとする。木槨墓の出現は単純な墓制の変化だけでなく、支配構造の変容と軌を一にするとみられ、木槨墓の面積や遺物組成の検討様相から、木槨墓を造営した集団の階層分化が想定されている。また、これらを含め木槨墓の分布を検討すると、慶州地域には、塔洞・隍城洞・千軍洞・朝陽洞・徳川里・舎羅里などに支配集団の存在が想定されるとする⁽⁴⁾。

チェ・スヒョン氏は慶州地域の木槨墓を一〇の類型に分けたうえで、二世紀後葉に北部の隍城洞遺跡と東南部の朝陽洞遺跡で出現し、四世紀以降は石材を用いた木槨墓が本格的に造営されるとみる。あわせて、木槨墓の築造過程の復原を試みている⁽⁵⁾。

これらの研究を総括すると、楽浪地域で木槨墓が終焉にむかう二世紀頃以降に朝鮮半島南部では木槨墓が展開していくことが知られている。



1 韓国・嶺南地域木槨墓の変遷概念図(中山里・下岱遺跡)〔李盛周論文注72を一部改変〕

図3 韓国原三国時代の木槨の変遷

(三) 弥生時代から古墳時代初めの木槨墓に関する研究

弥生・古墳時代の木槨墓は資料数が一定に達し、時期的変遷や分布などが概観されるまでにいたっている。弥生時代を含む三世紀以前の木槨墓については二〇〇三年に精緻な集成が行われており、それにもない研究史の整理がなされている。その時点では五四遺跡七七基であり、北部九州・中国・四国・近畿が主な分布地域であり、信越や九州南部にも点在する。また、弥生時代の木槨墓に関する分類が提示されるとともに古墳時代初め頃の木槨にもなう石積み施設についての用語が整理された。時系列的には木槨墓の以下の三段階の設定がなされている。すなわち、木槨墓は弥生時代中期に北部九州に出現し、次に弥生時代後期初頭から後半にかけて木槨墓の分布は山陰を中心とした中国地方にまで分布し、さらに弥生後期後半以降には柱材を用いた木槨墓が出現し、構造的な強化によって大型化するという。⁷⁶⁾

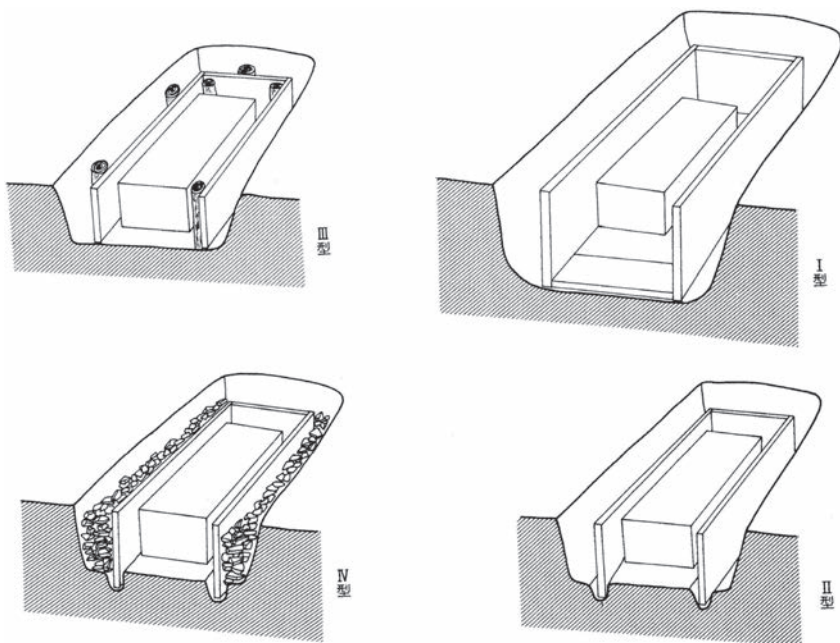
弥生時代から古墳時代の木槨墓を概観した柳沢一男氏は日本列島における初現例は弥生時代中期前葉であり、地域的には九州北部の玄界灘に発現するとした。その後、弥生時代中期後葉から後期中葉にかけては木槨墓が中国・近畿に拡散し、後期後葉から庄内式土器の時期にかけて木槨墓が盛行するとともに大型化し、分布域も北陸西部にまで及び、古墳時代前期前葉には有力者の埋葬施設が木槨墓から竪穴式石室へと移行していくが、一部地域（兵庫県西神ニュータウン三〇一―号、香川県原間六号墳）では五世紀代まで木槨墓が残存するとされる。⁷⁷⁾

弥生時代の木槨墓について、田中清美氏は集成をもとにして、底板・柱・周囲の礫の有無を指標として構造的分類を行った（図4―1―1）。その結論として、底板のない類型があることが弥生時代の木槨の主流であるとし、平面長方形を呈する木槨墓は春秋戦国時代に始まり、前漢代の箱型木槨から楽浪木槨・楽浪系木槨への系譜関係を想定し、弥生時代の木槨墓が朝鮮半島を経由して、中国大陸に淵源をもつと示唆し、朝鮮半島南部の国や倭国が楽浪郡を介して、前漢・後漢と交易や交渉を行った結果であるとして、弥生時代の木槨の系統性を史的状況から論じた。

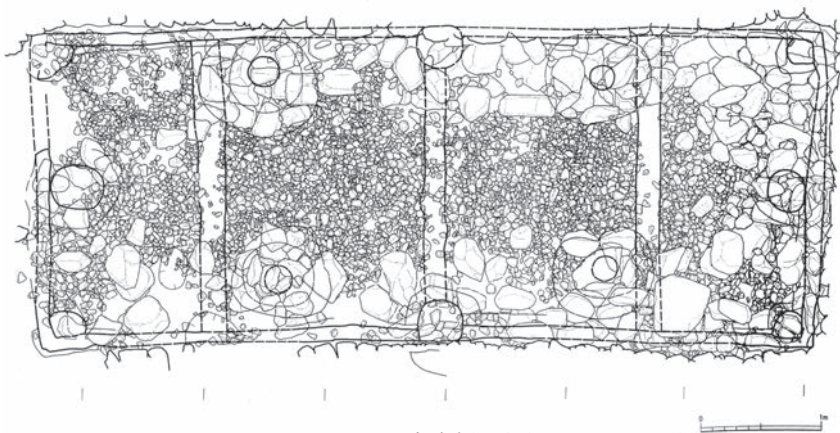
また、魏志倭人伝の「棺あるも槨なし」については、弥生中・後期の倭国に來た中国人には倭国の木槨が当時の中国や楽浪郡の木槨と同じものとはみられなかったことを反映しているとした。⁽²⁸⁾

木槨と石槨の二重槨である石囲い木槨という特徴のある埋葬施設(図4-2)で知られる三世紀中頃のホケノ山古墳(奈良県桜井市)の報告書の考察では弥生時代中期から古墳時代前期初頭の木槨と類似施設の例を集成して検討し、弥生時代後期後葉の中部瀬戸内から山陰地域の弥生墳丘墓で盛行した類型にホケノ山古墳木槨の直接的な系譜を求めた。また、朝鮮半島・日本列島の木槨にみられる構築方法や構造(布堀り状堀り方・添え柱・木棺を支持するまくら木)に関して、中国の木槨との違いであると、朝鮮半島嶺南地域における二世紀後半から三世紀前半の木槨の大型化は、日本列島の木槨の大型化・構造の複雑化とほぼ軌を一にするとし、このような木槨の変容が朝鮮半島經由で日本に伝播した可能性を示唆した。⁽²⁹⁾

弥生時代から古墳時代の木槨に関しては、高松雅文氏によって竪穴式石室との関係から整理されており、本論に關係する内容を摘要しておく。木槨墓は弥生時代中期に北部九州で床材をもたない平面長方形の形態として出現し、その系譜については、床材のある形態の木槨墓が中国・朝鮮半島で変容した後に日本列島にもたらされたとした。その後、木槨墓は弥生時代後期から終末期になると柱などの補強材や周囲に石槨などを伴う形態へと変化し、大型化と構造の複雑化がみられ、これは朝鮮半島の木槨墓の変化と連動しているとする。木槨墓の分布は弥生時代中期には北部九州と西部瀬戸内の一部に展開し、弥生時代後期後半には分布の中心が吉備・山陰に移るとともに地域の有力者の墳墓として採用され、弥生時代終末期には長さと幅の双方でさらに大型化し、重槨構造をとる例が現れ、瀬戸内海沿岸だけでなく、近畿・北陸にも分布するようになる。しかしながら、木槨墓は古墳時代前期には急に営されなくなり、散在的にわずかな例が知られるのみとなる。弥生時代から古墳時代初めの木槨墓の展開の画期としては弥生時代後期後半に分布が拡大する点にあり、消滅に関しては弥生時代終末に急激に終焉をみるところにあ



1 弥生時代木槨構造の分類模式図〔田中清美論文注78を一部改変〕



2 ホケノ山古墳木槨平面図

図4 弥生～古墳時代の棺槨の例

るとする。また、竪穴式石室との比較では弥生時代には木槨がより高位階層の人々の墓であるとし、木槨と竪穴式石室は系譜が異なる⁽⁸⁰⁾とした。

このような弥生時代から古墳時代の初めにかけての木槨墓の形態分類に基づき、木柱や積み石などの構造や付帯施設の特徴はあるが、木槨自体の基本的要件としては平面長方形で箱形を呈することを確認しておきたい。

(四) 中国・朝鮮半島・日本の棺槨研究の動向

日本の弥生時代を中心として古墳時代の始源期までの棺槨に関しては、中国・朝鮮半島の墓制との関係から整理しておく。まず、魏志倭人伝を含む『三国志』が編纂された時点の中国では、すでに木槨墓は衰退しており、磚室墓や洞室墓（土洞墓）のような出入り口の付された通路によって外部との行き来が可能となり、閉鎖された空間である木槨墓と葬送や他界の観念が変化したとみられている。いっぽう、楽浪郡では墓制の主流が磚室墓へと移った三世紀頃まで木槨が残存し、中国大陸側とは異なる墓制の様相が指摘されている。このように三国時代には縷々述べてきた葬礼を構成する棺槨のうち、槨はすでに過去のものとなっていたのであり、その意味では棺槨がそろっていることは現実の習俗としてよりも葬礼を観念的に象徴する物質的要素であったと思われる。

朝鮮半島では二世紀頃には木槨墓が出現したとみられており、新羅の積石木槨墓に典型的なように他の施設を伴い、地域によつては五世紀頃まで行われた。

弥生時代から古墳時代初め頃にかけての日本列島には北陸以西に木槨墓が散在したことが明らかになっている。その系譜については、よりさかのぼる時期に木槨墓が出現した朝鮮半島からの影響が想定されている。その朝鮮半島の木槨墓は楽浪郡の墓制からの系譜が考えられている。

このように同時期の中国ではすでに木槨墓が衰退していることから、弥生時代から古墳時代始めにかけての木槨墓について、朝鮮半島からの系統性が考えられ、さらにその淵源は楽浪郡の木槨墓にあるとする見方が主体である。

いずれにしろ、現状における東アジアの木槨墓の研究からは、『三国志』編纂時点の中国では完整的な棺槨を備えた墓は理念的な存在であったことが明らかになってきた。

四 棺槨の語と魏志倭人伝の葬礼記述の意味

ここまで中国の史料・文献と考古学の成果から魏志倭人伝にみえる「棺あるも槨なし」という倭人の葬送儀礼を検討するために同時代的な知見を整理してきた。これらによって魏志倭人伝の葬礼記事と棺槨に関する同時代的な認識について考察したい。

まず、中国古代における葬送観念においては、棺と槨は死者の身体を土から隔て、それによって腐敗を防ぐという効果が期待されたのであり、そのために棺ととくに槨は材の厚さとこれらを重ねることが求められた。すなわち、棺槨を厚く、多重にすることが厚葬の重要な基準であって、これらを欠くことは儒教的な葬礼においては死者の肉体を保全する点において要件を欠くものとされた。

この点において、魏志倭人伝にみえる棺を用い、槨を用いないという倭人の風習は、儒教的葬礼の規範や同時代の厚葬の規範からは、『三国志』編纂時点では倭人が少なくとも厚葬ではなかったという認識があったことが知られる。倭人の葬礼と対置的に理解できるのが、「厚葬にして、槨有れども棺無し」とある『三国志』魏書東夷伝夫余条の記述である。このような魏志倭人伝と夫余伝の葬礼に関する記述を対比してみると、『三国志』の編者は中国社会の礼俗の規範からは東アジア諸民族のなかでも相対的に倭人の薄葬を認識していたことが知られる。

倭の葬送に関する習俗の重要な記述としては、卑弥呼の葬礼と墓に関する内容をあげねばなるまい。すなわち、魏志倭人伝には卑弥呼の墓は「卑弥呼以死。大作冢径百余步。徇葬者奴婢百余人」と記されており、このなかでとくに造墓に関わる考え方や労力を含めた上での規模として「大作冢」とあることが注意される。この語は『三

志』では呉書・孫和何姬伝の裴松之注に引く『江表伝』に用例がみえる。孫皓が張布の娘を美人（皇妃の位の一つ）として寵愛し、この夫人が死んだ時、孫皓は悲しみと思慕から後苑に大きな冢を築いた。工人たちに命じて柏の木で人形を作らせ、それらを冢の中に入れて墓を守る護衛兵とし、金銀や珍宝を夫人と一緒に葬ったが、その数は莫大なものであった。葬礼が終わった後、孫皓は後宮に引きこもって喪に服し、半年も姿を見せなかったので、都の人々は葬礼が大いに豪奢であったため、みな孫皓が死んで、このように葬られたのだといった、とある。⁸¹

ここでは「大作冢」が厚葬の象徴として用いられており、その葬礼が呉の皇帝である孫皓の葬礼と見紛うほどのものであったことを示している。このような用例と用法を敷衍し、しばしば参照されるように経書などにみえる墳丘の高低を厚葬の規範とするならば、卑弥呼の墓についての「大作冢」という語の用い方も厚葬を指すものとみてよからう。

ここまでの知見を総じていうならば、倭人の葬送習俗としては、卑弥呼の墓の用語にみられたように厚葬があり、その一方で倭人の一般的習俗として棺のみを用い、槨を用いないことに象徴される薄葬があることになる。ここには為政者である卑弥呼の厚葬と倭人一般の薄葬とが対比的に記されており、これも階層関係とそれによる礼俗が両者の差異として反映していると考えられる。ただし、倭人一般の葬送は楊王孫の説く「羸葬」のような極端なものではなく、あくまで棺のみを用いることによる薄葬であり、その意味では中国古代以来の葬礼を規範として記述されていることがわかる。

ひるがえって同時代の中国の墓制をみるに、棺槨の双方を備えた木材を多用する墓室構造はすでに消滅しており、出入り口を設け、墓室内部への行き来が可能な磚室墓へと、その主流が変化している。曹操の墓とされる西高穴二号墓が、このような出入り口をもつ磚室墓であったことを論拠とするまでもなく、既述の中国古代墓制の変遷観からも、三国時代には磚室墓が主たる墓制であったことは一般的な認識である。

すなわち、魏志倭人伝と同時代の中国では、すでに木材で構築した槨は存在しないのであり、『三国志』編纂時に槨を目的の当たりにはなかつた。同時期の日本列島には木槨が存在し、被葬者の階層性を反映するとされるが、すでにふれたように魏志倭人伝の「槨あるも槨なし」について、魏の遣使などにとっては倭国の木槨が当時の中国や楽浪郡の木槨と同じものとはみられなかつたことを反映しているという所見が参考になる。三国時代において槨を葬礼の規範とするのは、すでに理念的な次元での認識であった。そのような『三国志』編纂時点における儒教的葬礼に基づく観念的な規範においてなされたのが、槨を用いず、棺のみを用いる倭人の葬礼の記述である。それゆえに、この記述のみをもって、個別具体的な考古学的事例と比較、対照したうえで、倭の葬礼の実態としての理解や位置づけと直結することは、『三国志』編述の同時代的な検討としては方法を逸することにならう。

いっぽう倭人の習俗に関する『三国志』の認識の背景は東夷伝の序が参照される。すなわち、「夷狄の邦といえども、俎豆の象（かたち）存り。中国礼を失し、これを四夷に求む、猶、信あり」という記述であり、これは『春秋左氏伝』昭公十七年の孔子の言にもとづくとされ、典故に儒教的な背景があることが知られる。この後に「その国を撰次し、その同異を列し、以て前史の未だ備わらざる所を接（つ）ぐ」という陳寿の言が続く。ここでは東夷は夷狄の国々であるといえども、俎豆すなわち祭祀の儀礼が伝わっており、中国に礼が失われた時、四方の異民族の間にその礼を求めるといふことも実際にありえるのであり、それがために国々を撰次し、それらの同異を列して、それによってこれまでの史書に未整備の内容を補う、と述べている。序文では俎豆に象徴される儒教的な礼俗が東夷諸族に関する文化的判断の基準となっており、このような認識においては槨槨をともに備え、かつそれらが多重であることが厚葬の程度を顕現する儒教的葬礼の規範となっている。東夷伝の記述をみると、東沃沮は槨を用い、土葬して残った骨のみを槨に納め、一家の人々はみな一つの槨を共有しているとされ、韓では槨はあるが槨がないと記されている。高句麗では金銀財宝を費やして、「厚葬」すなわち厚く葬るとあるいっぽう、石を積ん

で封となし、松柏を植える⁸⁶とあり、これは積石塚を指すから、この点では一定の事実を反映している。これらを踏まえても、さきにふれた夫余伝の槨とともに高句麗にみられる副葬品などによる厚葬とは別の要素として、槨は用いず、棺のみを用いるという倭人の葬送習俗は棺槨に対する葬礼の規範によりながら、東夷の習俗のなかで相対的に位置づけられていることが指摘できる。

結語

本論では魏志倭人伝にみえる棺槨について、同時代の文献・史書や考古資料を参照して、『三国志』編纂時点での習俗とその認識という観点から考察を試みた、以下に行文にそって摘要することで結語にかえたい。

まず、魏志倭人伝にみえる棺槨に関する研究史を整理し、そのうち中国の史書や経書に依拠した出典論的方法を考古資料との相対により行う研究を再評価した。

次に魏志倭人伝と編纂時期あるいは内容の示す時代に近い中国史料や経書等にみえる棺槨の用例と用法を抽出し、棺槨は葬礼の重要な要素であり、その厚みや重層の程度あるいは材質は身分階層と結びついており、これらが遺骸の保全という点から、厚葬と薄葬を分かつ葬礼の規範であることを確認した。

さらに魏志倭人伝に併行する時期の中国・朝鮮半島・日本列島の棺槨の実態に関して考古資料をもとに整理し、この時期の中国では木槨墓がすでに衰退しており、出入り口を設け、墓室内への行き来が可能な墓制へと変容しており、弥生時代から古墳時代初めにかけての木槨墓については朝鮮半島からの系統性が想定され、その淵源については楽浪地域の木槨墓であると推定されていることを示し、現状での東アジアおよび日本列島の木槨墓に関する系譜に関する知見を摘要した。

これらを踏まえて魏志倭人伝にみえる棺槨の語を葬礼の記述のなかで理解することを試み、その結果、魏志倭人

伝と同時代の中国ではすでに木材による構築物としての槨は基本的に存在せず、棺槨を葬礼の規範とすることは、すでに理念的な次元での認識であり、そのような観念的な葬礼の規範において記述されたのが魏志倭人伝の槨を用いず、棺のみを用いるという記述であったと結論した。よってこの記述のみをもつて、実態としての個別具体的な事例と対照して倭の葬送を論じる視点よりも、『三国志』編纂時点での厚葬・薄葬という葬礼の次元での同時代的認識として把握すべきであることを述べた。

註

- (1) 用字に関して、本来の槨は引用箇所を使い、その他は一般的に用いられている槨を用いた。
- (2) 三品彰英『邪馬台国研究総覧』（創元社、一九七〇年）一〇八―一〇九頁
- (3) 佐伯有清『魏志魏志倭人伝を読む 上 邪馬台国への道』（吉川弘文館、二〇〇〇年）一四五―一四七頁
- (4) 栗原圭介「棺槨考」（『大東文化大学紀要 文学篇』九、一九七六年）
- (5) 『礼記』檀弓上
国子高曰葬也者、藏也、藏也者、欲人之弗得見也。是故、衣足以飾身、棺周於衣、槨周於棺、反壤樹之哉。
- (6) 『論語』先進篇
顏淵死、顏路請子之車以爲之槨。子曰才不才、亦各言其子也。鯉也死、有棺而無槨、吾不徒行以爲之槨。以吾從大夫之後、不可徒行也。
- (7) 『荀子』正論
- (8) 世俗之爲說者曰太古薄葬、棺厚三寸、衣裳三領、葬田不妨田、故不掘也。
『墨子』節用中
古者聖王制爲節葬之法曰衣三領、足以朽肉、棺三寸、足以朽骸：（後略）
- (9) 『墨子』節葬下
故古聖王制爲葬埋之法、曰棺三寸、足以朽體、衣裳三領、足以覆惡。
- (10) 『礼記』檀弓上
昔者夫子居於宋、見桓司馬自爲石槨、三年而不成。夫子曰若是其靡也、死不如速朽之愈也。
- (11) 『礼記』檀弓上
曾子曰子何以知之。有子曰夫子制於中都、四寸之棺、五寸之槨、以斯知不欲速朽也。
- (12) 楊王孫と嬴葬については下記論文参照。なお、現代中国語では嬴葬は裸葬と表記される場合がある。
卜白「楊王孫嬴葬論」（『孔子研究』一九九八年第一

- 期)〔中国語文獻〕
- 華夫脱「楊王孫の“裸葬”心声」(『雜文月刊』二〇一三年第九期)〔中国語文獻〕
- 趙超「“一牀錦被遮蓋”与中国古代“裸葬”習俗」(『大衆考古』二〇一五年第二期)〔中国語文獻〕
- 王杰「兩漢薄葬遺令的探究」(『佳木斯教育学院学报』二〇一三年第九期)〔中国語文獻〕
- (13) 『漢書』卷六七・楊胡朱梅云伝第三七・楊王孫
死則為布囊盛尸、入地七尺、既下、從足引脱其囊、以身親土。
- (14) 牧尾良海「漢代薄葬論の典型―楊王孫と趙咨―」(『智山学报』一二・一三、一九六四年)
楊王孫と趙咨の薄葬論については、主としてこの論考によった。
- (15) 『礼記』壇弓上
有虞氏瓦棺、夏后氏剡周、殷人棺槨、周人牆置窆。
- (16) 李玉洁「試論我国古代棺槨制度」(『中原文物』一九九〇年第二期)〔中国語文獻〕
- (17) 池田末利「魂・魄考―思想の起源と發展」『中国古代宗教史研究―制度と思想―』(東海大学出版会、一九八一年)〔初出は一九五三年〕
福永光司・興膳宏『莊子』外篇(筑摩書房、二〇一三年)
- (18) 小南一郎『楚辭』(筑摩書房、一九七三年)四八―五五頁
『莊子』外篇
- (19) 『莊子』外篇
- 紛乎宛乎、魂魄將往、乃身從之、乃大歸乎。
- (20) 『韓非子』解老篇
凡所謂崇者、魂魄去而精神乱、精神乱則無德。鬼不崇人則魂魄不去、魂魄不去而精神不乱、精神不乱之謂有德。
- (21) 『楚辭』国殇
身既死兮神以靈、子魂魄兮為鬼雄。
- (22) 考古学的観点から東晋代の壁画傍題や唐代墓誌にみえる語句などの考古資料に招魂の痕跡を求めようとした最近の論考としては下記がある。
李梅田・李童「魂歸于墓…中古招魂葬略論」(『江漢考古』二〇一九年第四期)〔中国語文獻〕
- (23) 魂魄に関する言説は数多いが、以上にあげた古典の記述の吟味や考古資料の接点も含めて、本論で参照した近年の論考をあげておく。
白雲飛「『魂魄』について…『莊子』と『楚辭』を中心に」(『人間社会学研究集録』(大阪府立大学大学院人間社会学研究科)六、二〇一一年)
黄曉芬「魂魄説…古代中国の祖靈祭祀について」(『総合人間科学』(東亜大学総合人間・文化学部文明史学研究室)一、二〇〇一年)
- (24) 『墨子』七患
故曰以其極賞、以賜無功、虛其府庫、以備車馬衣裘奇怪、苦其役徒、以治宮室觀樂、死又厚為棺槨、多為衣裳、生時治台榭、死又修墳墓、故民苦於外…(後略)
- (25) 『礼記』月礼
命百官…(中略)…審棺槨之薄厚、塋丘壘之大小、高

卑、厚薄之度、貴賤之等級。

(26) 『礼記』 礼器

有以大為貴者、宮室之量、器皿之度、棺槨之厚、丘封之大、此以大為貴也。

(27) 『墨子』 節葬下

此存乎王公大人有喪者、曰棺槨必重、葬埋必厚、衣裳必多、文繡必繁、丘隴必巨。

(28) 『礼記』 檀弓上

天子之棺四重、水兕革棺被之、其厚三寸、桹棺一、梓棺二、四者皆周。

(29) 『荀子』 礼論篇

故天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重。

(30) 『莊子』 天下篇

天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重。

(31) 栗原圭介「棺槨考」(前掲注1)

(32) 『後漢書』 樊宏陰識列伝第二二・樊宏

二十七年、卒。遺教薄葬、一無所用、以為棺柩一臧、不宜複見、如有腐敗、傷孝子之心、

(33) 『三國志』 卷五一・吳書七・張顧諸葛步伝・張昭

年八十一、嘉禾五年卒。遺令幅巾素棺、斂以時服。權素服臨弔、諡曰文侯。

(34) 『三國志』 卷五一・吳書七・張顧諸葛步伝・諸葛瑾

赤烏四年、年六十八卒、遺命令素棺斂以時服、事從省約。

(35) 『後漢書』 志第六・礼儀下

諸侯王、公主、貴人皆樟棺、洞朱、雲氣画。公、特進

樟棺黑漆。

(36) 陳穎「三國時期的薄葬与厚葬」(成都大学学报「社科版」二〇〇九年第六期)(中国語文献)

王傑「兩漢薄葬違令的研究」(佳木斯教育学院学报「二〇一三年第九期」)(中国語文献)

(37) 郭宝鈞「中国青銅器時代」(新華書店、一九六三年)一八四—一九〇頁(中国語文献)

(38) 劉仕驥「中国葬送搜奇」(上海書局、一九五七年)四五頁(中国語文献)

(39) 李玉洁「試論我国古代棺槨制度」(「中原文物」一九九〇年第二期)(中国語文献)

(40) 浙江省文物考古研究所編「南河浜」松沢文化遺址發掘報告(文物出版社、二〇〇五年)(中国語文献)

(41) 趙輝・芮国耀「浙江桐鄉普安橋遺址發掘簡報」(「文物」一九九八年第四期)(中国語文献)

(42) 山東省文物考古研究所編「大汶口統集」大汶口遺址第二、三次發掘報告(科学出版社、一九九七年)(中国語文献)

(43) 山東省博物館・山東省文物考古研究所編「鄒野野店」(文物出版社、一九八五年)(中国語文献)

(44) 山東省文物考古研究所ほか「臨朐西朱封龍山文化重淳墓的清理」張学海主編「海岱考古」第一集(山東大學出版社、一九八九年)(中国語文献)

中国社会科学院考古研究所「山東臨朐西朱封龍山文化墓葬」(「考古」一九九〇年第七期)(中国語文献)

(45) 近年の專論としては、邵崇山「先秦時期墓葬棺槨制度

略論」〔保定学院学报〕二四—四、二〇二一年〔中国語文献〕

引用した論文の他に下記論考を参照した。

黄晓芬「中国の木槨墓の形成過程」〔考古学ジャーナル〕五一七、二〇〇四年

宋玲平「晋系墓葬棺槨多重制度的考察」〔考古与文物〕二〇〇八年第三期〔中国語文献〕

白国紅・賀軍妙「從棺槨制度的演變看春秋晚期新的礼制規範的形成——以太原金勝村趙卿墓為切入点」〔山西師大學報〔社会科学版〕〕二〇〇八年第四期〔中国語文献〕

(46) 黄晓芬「漢墓の變容——槨から室へ」〔史林〕七七—五、一九九四年

黄晓芬「中国古代葬制の伝統と変革」〔勉誠出版、二〇〇〇年〕

(47) 袁勝文「棺槨制度的產生和演變述論」〔南開學報〔哲学社会科学版〕〕二〇一四年第三期〔中国語文献〕

(48) 山東大學歷史系考古專業教研室編「泗水尹家城」〔文物出版社、一九九〇年〕〔中国語文献〕

(49) 論旨とは直接関係しないが、棺槨制度の完成に關しては下記の説がある。

西周説—張得水「中原地区原始棺槨制度的起源与發展」〔中原地区文明化進程學術研討論文集〕〔科学出版社、二〇〇六年〕〔中国語文献〕

前漢代初め頃—李玉洁「試論我国古代棺槨制度」〔前

春秋時代中頃から戦国時代初め頃—趙化成「周代棺槨多重制度研究」〔国学研究〕五、一九九八年〔中国語文献〕

(50) 黄晓芬「漢墓の變容——槨から室へ」〔前掲注46〕

黄晓芬「中国古代葬制の伝統と変革」〔前掲注46〕

(51) これらを整理した論考としては下記参照。

劉尊志「西漢諸侯王墓棺槨及置槨工具淺論」〔考古与文物〕二〇一二年第二期〔中国語文献〕

(52) 馬育良「六安双墩一号漢墓墓主考」〔合肥師範學院學報〕二〇〇八年第四期〔中国語文献〕

(53) 石家庄市圖書館文物考古小組「河北石家庄市北郊西漢墓發掘簡報」〔考古〕一九八〇年第一期〔中国語文献〕

(54) 長沙市文物考古研究所・長沙簡牘博物館「湖南長沙望城坡西漢漁陽墓發掘簡報」、宋少華「長沙西漢漁陽墓相關問題芻議」〔文物〕二〇一〇年第四期〔中国語文献〕

(55) 何旭紅「湖南望城風箏嶺漢墓年代及墓主考」〔文物〕二〇〇七年第二期〔中国語文献〕

(56) 河北省文物研究所等「獻縣第三六号漢墓發掘報告」〔河北省文物研究所編「河北省考古文集」第一集〔東方出版社、一九九八年〕〕〔中国語文献〕

(57) 長沙市文化局文物組「長沙陡壁山西漢曹撰墓」〔文物〕一九七九年第三期〔中国語文献〕

湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号漢墓」〔考古學報〕一九八一年第一期〔中国語文献〕

(58) 任相宏・崔大庸「山東長清原双乳山一号漢墓發掘簡報」〔考古〕一九九七年第三期〔中国語文献〕

掲注39

- (59) 大葆台漢墓発掘組・中国社会科学院考古研究所編『北京大葆台漢墓』(文物出版社、一九八九年)〔中国語文献〕
- (60) 王鑫・程利『石景山区老山漢墓』(『中国考古学年鑑』二〇〇一年)〔中国語文献〕
- (61) 劉来成『河北定興四〇号漢墓発掘簡報』(『文物』一九八一年第八期)〔中国語文献〕
この墓は前漢中山懷王劉修墓に比定されている。
- (62) 中国科学院考古研究所編『洛陽燒溝漢墓・洛陽区考古発掘隊』(科学出版社、一九五九年)〔中国語文献〕
- (63) 白雲翔『漢末・三国時代考古およびその新展開―北方曹魏を中心に―』愛媛大学古代鉄文化研究センター編『曹操高陵の発見とその意義―三国志 魏の世界―』(汲古書院、二〇一一年)
- (64) 近年において、三国時代の墳墓について整理した専論としては下記がある。
韓国河・朱津『三国時期墓葬特征述論』(『中原文物』二〇一〇年第六期)〔中国語文献〕
- (65) 河南省文物考古研究院編『曹操高陵』(中国社会科学院出版社、二〇一六年)〔中国語文献〕
愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター編『曹操高陵の発見とその意義―三国志魏の世界』(汲古書院、二〇一一年)
- (66) 河南省文物考古研究所編著…渡邊義浩監訳解説…谷口建速訳『曹操墓の真相』(国書刊行会、二〇一一年)
- (67) 河南省文物考古研究所編著『曹操墓真相』(科学出版社、二〇一〇年)〔中国語文献〕ほか。
- (66) 黄曉芬『漢墓の変容―椰から室へ』(前掲注46)
- (67) 黄曉芬『中国古代葬制の伝統と変革』(前掲注46)
本論で摘要した高久氏の見解は下記の論考によった。
高久健二『楽浪墳墓の編年』(『考古学雑誌』七八―四、一九九三年)
- (68) 高久健二『楽浪古墳文化研究』(学研文化社、一九九五年)〔ハングル文献〕
- (69) 高久健二『楽浪の木槨墓』(『考古学ジャーナル』五一七、二〇〇四年)
- (70) 高久健二『韓国における原三国時代の墓制』(『季刊考古学』九二、二〇〇五年)
- (71) 東潮『魏晋と魏志東夷伝諸国の墓制』(『朝鮮学報』二二九、二〇一三年)
- (72) 高久健二『楽浪の木槨墓』(前掲注67)
- (73) 李柱憲『三韓の木槨墓について―嶺南地方出土資料を中心に―』(『古文化』四四、一九九四年)〔ハングル文献〕
- (74) ユン・ヒョンジュン『木槨墓の等級を通してみた三韓前期階層社会』(『古文化』七八、二〇一一年)〔ハングル文献〕
- (75) 李在賢『韓国嶺南地域木槨墓の構造と葬習』和田晴吾編『古代日韓交流の考古学的研究―葬制の比較研究―』(平成一一年度～平成一三年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇三年)
- (76) 李盛周『木槨墓から木槨墓へ―蔚山・中山里遺跡と茶雲洞遺跡に対する検討―』(『新羅文化』一四、一九九七

(74) 年)〔ハンデル文獻〕

(74) 権龍大「慶州地域の出現期木槨墓研究」〔韓国古代史研究〕九、二〇一一年)〔ハンデル文獻〕

(75) チェ・スヒョン「慶州地域木槨墓の変遷過程と性格検討」〔野外考古学〕二一、二〇一四年)〔ハンデル文獻〕

(76) 有馬伸「三世紀以前の木槨・石槨」和田晴吾編「古代日韓交流の考古学的研究―葬制の比較研究―」(平成一年度)平成一三年度科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇三年)

(77) 柳沢一男「日本の木槨墓研究の現状」〔考古学ジャーナル〕五一七、二〇〇四年)

(78) 田中清美「弥生時代の木槨と系譜」堅田直先生古希記念論文集刊行会編『堅田直先生古希記念論文集』(真陽社、一九九七年)

(79) 岡林孝作「日本列島における木槨の分類と系譜―ホケノ山古墳中心埋葬施設の成立背景をめぐって―」奈良県立橿原考古学研究所編『ホケノ山古墳の研究』(奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇八年)

(80) 高松雅文「木槨と堅穴式石室」一瀬和夫ほか編『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』(同成社、二〇一一年)

(81) 『三國志』卷五〇・呉書五・妃嬪伝第五・孫和何姫裴松之注

江表伝曰皓以張布女為美人、有寵、…(中略)…会夫

人死、皓哀愍思念、葬于苑中、大作冢、使工匠刻柏作木人、内冢中以為兵衛、以金銀珍玩之物送葬、不可称計。

已葬之後、皓治喪於内、半年不出。国人見葬太奢麗、皆謂皓已死、所葬者是也。

(82) 東夷伝序文に関する專論としては下記論考がある。江畑武「魏志」卷三〇烏丸鮮卑・東夷伝の序文について」〔阪南論集 人文・自然科学編〕二八一―一、一九九二年)

(83) 『三國志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三〇／東夷

雖夷狄之邦、而俎豆之象存。中国失礼、求之四夷、猶信。故撰次其国、列其同異、以接前史之所未備焉。

(84) 『三國志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三〇・東夷／東沃沮

其葬作大木槨、長十餘丈、開一頭作戸。新死者皆佞埋之、才使覆形、皮肉尽、乃取骨置槨中。举家皆共一槨：(後略)

(85) 『三國志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三〇・東夷／韓

其葬有槨無棺。

(86) 『三國志』卷三〇・魏書三〇・烏丸鮮卑東夷伝第三〇・東夷／高句麗

便稍作送終之衣。厚葬、金銀財幣、尽於送死、積石為封、列種松柏。